

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

近現代日本の研究資源に関する基礎的研究

Fundamental research concerning research resources on modern and contemporary Japan

## 2. 研究代表者氏名

小堀聡・福家崇洋

Kobori Satoru/Fuke Takahiro

## 3. 研究期間

2022年4月-2025年3月(1年目)

## 4. 研究目的

本研究班の目的は、京都大学人文科学研究所（以下、人文研）を中心とする諸機関に所蔵される、近現代日本の研究資源の整理・保存・公開である。これまで人文研には旧日本部が収集してきた研究資源が存在するほか、近年もみやこの学術資源研究・活用プロジェクトを通じて数多くの研究資源が蓄積されてきた。これらはいまだ整理の途上であるものも存在するが、今後精力的に整理・公開していくことで、共同利用拠点、共同研究拠点としての人文研への積極的な貢献を目指す。あわせて、本研究班には他機関の研究者も積極的に参加してもらうことで、研究資源情報の共有や、整理公開作業の協働化を推し進めたい。これら研究資源の整理と公開は、基礎研究として、今後の人文科学の発展に不可欠であるばかりでなく、人文研の共同研究班のネットワークの増大や扱いうる研究資源の拡大にとっても大きな意味を持つと考えている。

The purpose of this research group is to organize, preserve, and release to the public the research resources on modern and contemporary Japan held by the Institute for Research in Humanities, Kyoto University and other institutions. Until now, Institute for Research in Humanities has had research resources collected by the Japanese Division. In recent years, through the Miyako Academic Resources Research and Utilization Project, a large number of research resources have been accumulated. Although some of these are still in the process of being organized, we aim to actively contribute to the Joint Usage Center and Joint Research Center by organizing and releasing them in the future. In addition, we would like to have researchers from other institutions actively participate in this research group to promote the sharing of research resource information and collaboration in the work of organizing and

publishing. The organization and disclosure of these research resources is not only essential for the future development of the humanities as a basic research field, but also carries significance for the Institute for Research in Humanities through the expansion of a network of joint research groups and the proliferation of research resources.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度は主に人文研所蔵岩井会旧蔵資料の整理と核融合科学研究所所蔵の森一久資料の調査と整理を行った。前者は大阪の岩井会から昨年度寄贈を受けたもので、1970～1990年代の市民運動の機関紙誌、ビラなどから構成される。およそ月1回のペースで班員が集まって資料を分類することから始め、現在は目録の作成を継続中である。年度末にアルバイト1名を雇用し、目録化の作業を迅速化した。後者の資料は、原子力産業会議副会長などを歴任した森一久の旧蔵資料で、1950～2000年代にかけての原子力政策関係資料で構成されており、その約半分は未整理状態にある。本年度は2回調査を実施し、整理済み資料の内容を検討したうえで、未整理資料の目録化を開始した。以上の資料整理の他に他機関所蔵の資料整理に対する見聞を深めるべく、班員を募って尼崎歴史博物館への見学を行い、同館所蔵の資料を拝見し、職員の方と資料整理の方法などにつき意見交換を行った。

## 6. 本年度の研究実施内容

2022-05-16 研究班の概要と今後の進め方について 発表者 福家崇洋 人文科学研究所  
2022-05-19 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 黒川伊織・小堀聡・Till Knudt・福家崇洋 人文科学研究所  
2022-06-23 森一久資料（核融合科学研究所所蔵）の整理と意見交換 発表者 黒川伊織・小堀聡・喜多川進・福家崇洋 人文科学研究所・岐阜大学  
2022-06-24 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 小堀聡・喜多川進・福家崇洋・Till Knudt 人文科学研究所  
2022-07-14 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 小堀聡・福家崇洋 人文科学研究所  
2022-09-15 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 小堀聡・福家崇洋 人文科学研究所  
2022-10-13 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 小堀聡・福家崇洋 人文科学研究所  
2022-10-21 森一久資料（核融合科学研究所所蔵）の整理と意見交換 発表者 小堀聡・福家崇洋・瀬戸口明久 人文科学研究所  
2022-11-10 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 黒川伊織・小堀聡・Till Knudt・福家崇洋 人文科学研究所  
2022-12-08 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 小堀聡・福家崇洋 須永哲思 人文科学研究所・天理大学  
2023-01-12 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 小堀聡・福家崇洋 須永哲思 人文科学研究所・天理大学

2023-03-09 岩井会資料の整理と意見交換 発表者 小堀聡・Till Knudt・福家崇洋・須永哲思 人文科学研究所・天理大学

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		4	0	0	0	0	35	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
国立大学		1	0	0	0	0	3	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
公立大学		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
私立大学		4	0	0	0	0	9	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
大学共同利用機関法人		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
民間機関		1	0	0	0	0	4	0	0	0	0
		(1)	0	0	0	0	(4)	0	0	0	0
外国機関		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
その他 ※		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	0	0	0	0	(0)	0	0	0	0
計	0	10	0	0	0	0	51	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(4)	(0)	(0)	(0)	(0)

※「その他」の区分受入がある場合  
具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員  
無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	20		2	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名 (必須)	掲載 論文数 (必須)	掲載 年月日 (必須)	論文名 (必須)	発表者名 (必須)
1	環境情報科学	1	R4.7	環境政策史からみた環境政策研究の展望	喜多川進
2	寺尾忠能編『「後発の公共政策」としての資源環境政策——理念・アイデアと社会的合意』アジア経済研究所	1	R5.3	自動車環境対策と雇用喪失——1970 年代自動車排出ガス規制と2020 年代 EV シフトの比較	喜多川進
3	Zinbun	1	R5.3	Emergence of Global Environmental Policy in Japan: Saburo Okita and the Ad Hoc Group on Global Environmental Problems	Susumu Kitagawa
4	日本史研究	1	R5.3	高津正道と〈東洋インタナショナル〉—帝国日本と中国	黒川伊織

5	唯物論研究	1	R4.12	アジアにおけるコミュニズム―日本共産党の100年／101年を考察する視点	黒川伊織
6	日本史研究	1	R5.3	戦間期日中交渉における宮崎龍介	福家崇洋
7	筒井清忠編『昭和史研究の最前線 大衆・軍部・マスコミ、戦争への道』朝日新書	1	R4.11	無産政党の台頭と挫折	福家崇洋
8	朝治武・黒川みどり・内田龍史編『非部落民の部落問題』解放出版社	1	R4.11	堺利彦―社会主義運動から部落問題をとらえる	福家崇洋
9	European Journal of Japanese Philosophy	1	R4.10	(翻訳) Miki Kiyoshi "La forme marxienne de l'anthropologie"	Romaric Jannel, Fuke Takahiro
10	NARASIA Q	1	R4.10	奈良のモダニズム 鉄道・歌劇・映画	福家崇洋
11	岩城卓二・上島享・河西秀哉・塩出浩之・谷川穰・告井幸男編著『論点・日本史学』ミネルヴァ書房	1	R4.8	労働運動	福家崇洋
12	人文学報	1	R4.6	資料紹介 宮崎家所蔵宮崎滔天関係資料	福家崇洋
13	奈良県立大学ユーラシア研究センター編『奈良に蒔かれた言葉Ⅱ 近世・近代の思想』京阪奈情報教育出版	1	R5.3	樽井藤吉の軌跡と思想	福家崇洋

14	『天理大学教職教育研究』第5号	1	R4.12	学校・地域の連携と「社会に開かれた教育課程」のゆくえ：子ども・地域社会の変容の中での「性」をめぐる教育実践の検討	須永哲思
15	『日本の教育史学』第65集	1	R4.10	図書紹介 佐貫浩著『恵那の戦後教育運動と現代：『石田和男教育著作集』を読む』	須永哲思
16	『日本教育史研究』第41号	1	R4.8	書評に込めて	須永哲思
17	上田喜彦、仲淳編『教職実践演習（中・高）ハンドブック』（あいり出版）	1	R4.11	教職の意義と教育の制度	須永哲思
18	山口輝臣、福家崇洋編『思想史講義 戦前昭和篇』	1	R4.12	コラム5 生活綴方運動	須永哲思
19	山口輝臣、福家崇洋編『思想史講義 戦前昭和篇』	1	R4.12	講座派と労農派	黒川伊織
20	山口輝臣、福家崇洋編『思想史講義 大正篇』	1	R4.8	大正マルクス主義	黒川伊織

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文

	雑誌名 (必須)	インパクト ファクター (数値)(必須)	掲載 論文数 (必須)	掲載 年月日 (必須)	論文名(必須)	発表者名 (必須)
1	Technology and Culture	0.645	1	R4.4	When Energy Efficiency Begets Air Pollution: Fuel Conservation in Japan's Steel Industry, 1945-60	小堀聡

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
1	『思想史講義』大正篇	山口輝臣・福家崇洋	R4.8	筑摩書房
2	『思想史講義』明治篇Ⅰ	山口輝臣・福家崇洋	R4.10	筑摩書房
3	『思想史講義』戦前昭和篇	山口輝臣・福家崇洋	R4.12	筑摩書房
4	『思想史講義』明治篇Ⅱ	山口輝臣・福家崇洋	R5.2	筑摩書房

12. 本年度博士学位を取得した学生の数

	人数
博士学位を取得した学生の数	0

13. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由  
なし

14. 次年度の研究実施計画

次年度も岩井会旧蔵資料と森一久資料の調査と整理を継続した上で、名古屋大学経済学研究科所蔵「荒木光太郎文書」の整理を開始する。まず岩井会旧蔵資料については、作業のペースは今年度と同じ月1回の予定で、引き続き目録化の作業を進めていきたい。予算状況に応じてアルバイトを雇用して作業の迅速化をはかる。また、森一久資料については、本年度と同様、年2回の調査を実施し、未整理分の目録化を進めたい。最後に荒木光太郎文書は、東京帝国大学経済学部教授を務めた荒木光太郎の旧蔵資料であり、経済政策や日本占領政策にかんする文書などで構成される。これについても、年2回の予定で調査を実施する。これら以外に他館の資料見学も実施する。今年度は年2回を予定していたが、コロナの影響もあって年度末に1回のみにとどまった。次年度は2回行う予定で、班員内で全国に点在する貴重な資料の所在などの情報を共有していきたい。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

資料整理の中で発見された貴重資料の紹介、作成済みの目録の公開化など可能なかぎりで成果を公開していくことができればと考えている。"